

油彩

(テンペラ併用)

朽ちた果実を描く①

三浦明範の静物画講座

みうらあきのり 1953秋田 東京学芸大学卒 文化庁主催現代美術展、セントラル美術館
油絵本賞展、昭和会展、安井賞展、具象絵画ビエンナーレ、日本の絵画新世代展、両洋の眼現
代の絵画展、21世紀の旗手展などに出品 文化庁工芸美術家在外研修員としてベルギーに滞在(96
〜97) 春陽会会員



(図1)ピーター・ハウル・リューベンス
「十字架降架」
おなじみの「フランダースの犬」で、主
人公ネロが亡くなる前に見ることができ
た、憧れのリューベンスの作品。アント
ワープ、ノートルダム大聖堂。



(図2)「十字架降架」の側面

同時代の作家がキャンヴァスに移行したにもかかわらず、リ
ューベンスは巨大な作品群をすべて板絵で制作した。そのた
め反りの対策に、裏面に格子状の棧を渡したり、かなりの厚
さの板を使ったりと、その重量は莫大なものとなっている。

今回は、平面化ということについ
て述べましたが、今回からは、絵の
もうひとつの最大かつ根源的な主題、
情報の伝達について考えていきます。

■絵を描くということ②

―表現について―

私は3〜4年前、ベルギーに研修
のため、単身滞在していました。こ
の地は、日本人にもたいへん人気の
ある観光地でもあります。特にブル
ージュなどは、中世の建物がそのま
ま残っていて、美しい運河をボート
に乗って遊覧する、たくさん日本人
観光客を見ていると、一瞬ここが

何処なのか判らなくなる位です。
私は、このグルーニング美術館
やメモリンク美術館に、模写のため、
何度も通いました。

しかし何度通っても、街が美しい
ということは感じるのですが、一方
では、ちっとも感動していない自分
があるのです。もちろん、目的は絵

を見ることで、その街並みを観光す
るわけではないのですが、それにし
ても冷静すぎるのです。

最初は、「年のせい」で感動できな
くなったのかとも思いましたが、改
めて考えると、単純に、一人である
ということが原因だったような気が
するのです。もし傍に誰か居て、「き
れいだね」と話せたら、多分、こん
な気持ちにはならなかったのもし
れないのです。

私たちは、何か感動することに遭
遇した時、たとえその場に誰も居合
わせなくても、その感動を誰かに話
したくなりますね。つまり、感動と
いうものは、共有する相手がいるこ
とで、それが何倍にも増幅されるの
です。

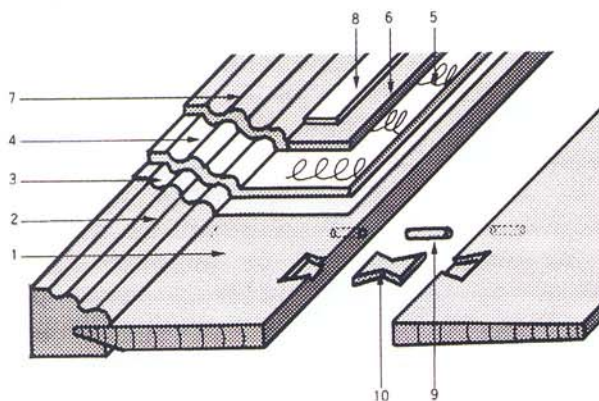
そのための伝達手段として、「表
現」があるのです。そして当然のこ
とながら、表現とは、相手があつて
初めて成り立つものなのです。よく、
「自分だけのために絵を描く」という



(図3)オーク材の裁断
木材の中心から放射状に割っていくことで、柱目板がたくさん作られる。



(図5)MDFボード
今回は顔装しないで展示したいと考え、全体の形を丸みのあるものにした。



1. パネル
2. 顔線
3. 膠
4. フレパレーション
5. アンダー・ドローイング
6. 絵具層
7. 顔線の彩色
8. ワニス
9. コマ
10. チキリ

(図4)パネルの構造
15世紀フランドル地方の板絵パネルは、画面と顔線はいったいで製作されていた。

人がいますが、これでは表現ということにはならないのです。それがたった一人であつても、見てもらう手がいて、初めて表現になるのです。したがって表現には、それを伝える相手との間に、お互いに通じ合える共通言語のようなものが必要になります。絵画においては、それが色や形で表されますが、それらは具象であろうと抽象であろうと、変わることはありません。

例えば赤という色からは、火、熱い、情熱、血などというものをイメージします。あるいは、円からは、完全、太陽、母性などというものを感ずるでしょう。このようなイメージは、人類が共通して持つもので、絵の上での共通言語として見る側にも伝達されるのです。

すなわち、私たちが絵を見る時、色や形はそれらが持つ既成の概念がイメージを決定していきます。それが抽象絵画のようなものなら、ある具体的な事物を記憶の中から引き出して鑑賞しているのです。また、それが具象傾向の絵画では、モチーフ自体の持つイメージが当然あるわけですが、その形と色が他の概念を持つものなら、複数のイメージを感じ

てしまうのです。言い換えれば、抽象表現は具象の発想から、具象表現は抽象の発想から始まる、ということなのです。

では、この表現にはどんなことが必要なのでしょう。このことについては、次回から述べていきます。

■朽ちた果実の制作

先のベルギーでの話題に戻りますが、街並みにはあまり感動できなかつた私にも、いくつかの興味を引いた事柄がありました。そのひとつが、今回のモチーフにした、朽ちたリングです。

街の外れの小さな商店のショーウィンドウに、からからに干からびたリングが飾ってあつたのです。瑞々しく、美味しそうなのはよく見かけますが、こんな皺々な物が飾つてあるのは不思議ともいえませんが、私にはとても美しく感じたのでした。

帰国後、こんな皺々のリングを作りたいと何度か試してみたのですが、日本のリングは甘さを追及したせい、か、そのままにしておくか、酸酵してドロドロになってしまいます。なかなか思っているような朽ち方になつてくれないので、1年間冷蔵庫に保



存しておいたものなのです。

前回に引き続き、メタル・ポイントを中心に制作しますが、今回は他の材料を併用してみようと考えています。が、この段階では何を使うかは未定で、制作しながら考えていきたいと思っています。

■支持体

ルネッサンスの初期までのイーゼルペインティングの支持体は、そのほとんどがオークや胡桃などの木板でした。その後、麻布を使ったキャンヴァスにその座を奪われますが、その理由は、作品の巨大化とそれに伴う重量の増加でした(図1、2)。

また、板の宿命とも言うべき「反り」を防ぐための工夫をしなければならなかったことも挙げられます。

1本の丸太から、よりたくさんの板材を得ようとすると、薄く平行に裁断していきます。すると、中心を通る1枚の板だけが「柁目」と呼ばれる平行線の木目を持ったものになります。他は「板目」と呼ばれる、楕円の同心円上の木目を持つものになります。この柁目板は、中心部と周辺部での乾燥による収縮の差が、「反り」にならずに厚さの「縮み」

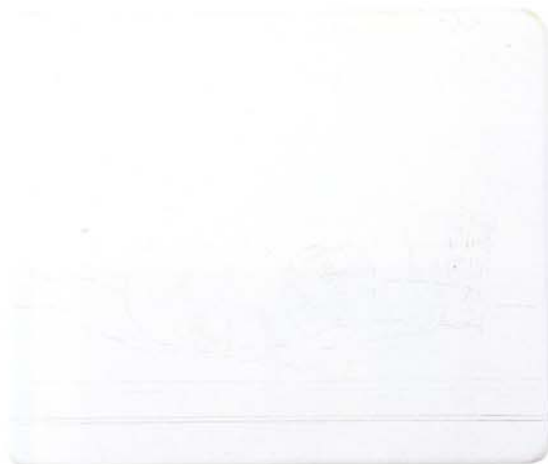
になります。しかし他の板目板は、乾燥と湿気で大きく「反って」しまうのです。したがって、板絵の支持体として使用できるものは、柁目板に限られてしまいます。

1本の材木から1枚の柁目板しか取れないのでは、いくら樹があっても足りません。そこで、木材を放射状に薄く裁断したのです。すると、全ての板は中心を通ることになり、柁目になるのです。もちろん、半分の大きさしか取れませんから、大きい画面には継ぎ足すこととなります。また、額縁と支持体を一体で製作することでも、反りを最小限に抑えることができました。(図3、4)

今回使用する支持体は、MDFです(図5)。これは以前も説明しましたが、木質繊維を圧縮して固めたもので、木目はありませんから、「反り」の心配が全くありません。欠点は、ある程度の厚さが必要なため(※注)、少し重くなることです。しかし、かつての板絵の欠点であった、巨大化の難しさや重量については、パネルにすることで簡単に解決できます。むしろこれからの絵画支持体としては、名誉回復されるべき材料ではないでしょうか。



(制作過程3)
更に黒さの欲しい所には、黒鉛を薄く塗布する。



(制作過程1)
シルバー・ポイントで軽く見当をつけていく。



(制作過程4)
テーブルの部分に、水彩黒で木目を描いておく。



(制作過程2)
次第に筆圧を強くし、正確な形にしていく。

(※注)10号位までなら、10~12mm程度の厚さがあれば充分である。それ以上の大きさになると、表に塗布した下地塗料の収縮で、画面が反ってしまう危険がある。その対策としては、裏に棧を渡してパネル仕立てにするか、裏面にも同じプレパレーションを施すことで解決できる。

■制作過程

1 プレパレーション

今回は、1000ccの水に70gのトタン膠を溶かしたものに、カオリンとチタニウムを各々3対1の割合で混ぜたもので塗料を作ります。前膠を塗布したボードに、この下地塗料を、縦横交互に6度塗りします。

2 ごく薄くシルバー・ポイントで描きます。

前にも述べましたが、なるべく描き直しをしないために、初めはごく弱く描いていきます。(制作過程1)

3 大体の形が取れたら、次第に強く描いていきます。(制作過程2)

4 さらに暗い部分を表現していきますが、この材料の欠点は、力強い黒さが出ないことです。黒さの不足を、他の材料で補うことになりませんが、この時点ではごく薄くペトロールで溶いた黒鉛を塗ります(制作過程3)。

5 テーブルの木目を水彩黒で描いておきます(制作過程4)。これはこの後、テーブル面全体にグレー調子をつけるときの準備です。

続きは次回に。